



TITLE:

FSERC News No.32

AUTHOR(S):

京都大学フィールド科学教育研究センター

CITATION:

京都大学フィールド科学教育研究センター. FSERC News No.32. FSERC News 2014, 32

ISSUE DATE:

2014-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182033>

RIGHT:



FSERC News No. 32

編集・発行：京都大学フィールド科学教育研究センター
 住所：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
 TEL：075-753-6420 FAX：075-753-6451
 URL：http://fserc.kyoto-u.ac.jp

2014年2月

ニュース

フィールド研創立10周年記念式典を終えて

センター長 吉岡 崇仁

2013年11月26日に芝蘭会館において、フィールド研創立10周年記念式典を挙行了しました。記念式典には学内外の関係者と現構成員ら139名が出席し、松本紘総長からは、京都大学を特徴づけるフィールド科学の研究と全学共通教育での活動などを評価するお言葉をいただき、また、文部科学省の金子実視学官と日本財団の荻上健太郎海洋安全教育チームリーダーから、それぞれ、フィールド研への強い期待を込めた祝辞をいただきました。続いて、山下洋副センター長より、「森里海連環学」の10年間の成果や今後の活動の方向性に関する講演に加えて、畠山重篤社会連携教授より、森は海の恋人運動の紹介、東日本大震災からの復興へのあゆみなどについて講演いただきました。

当日夕刻より、10周年記念祝賀会と同時期に開催された国際シンポジウムのバンケットを合同で開催しました。学内外



松本総長の挨拶

関係者、国際シンポジウム参加者、現・元教職員、学生も交えて、創立10周年を祝うとともに活発な学術交流がありました。

式典及び祝賀会での皆さまからのお話、また前号に

寄稿いただいた文章を拝見し、今後の課題も見えてきました。将来のあるべき森・里・海の連環の姿を創出し、あるいはそれを可能とする人材を育成するには、まだまだ時間が必要だと思います。フィールド研の次の10年の課題として、各地にあるフィールド施設を活用しながら、森里海連環学の一層の充実を図っていく所存です。



畠山社会連携教授の記念講演

森と里と海のつながりに関心を寄せてくださる皆さまには、これまでのご支援に心よりお礼申し上げますとともに、従前に増してのご協力を賜りますようお願い申し上げます。

式次第（司会進行：徳地 直子 教授）

式 辞 吉岡 崇仁 センター長

挨拶 松本 紘 京都大学総長

来賓挨拶 金子 実 文部科学省高等教育局専門教育課視学官

来賓挨拶 笹川 陽平 公益財団法人日本財団会長
 （代理：荻上 健太郎）

特別講演 山下 洋 副センター長

特別講演 畠山 重篤 社会連携教授
 （NPO 法人森は海の恋人理事長）

森里海連環学国際シンポジウム 「Integrated Ecosystem Management from Hill to Ocean」

森里海連環学教育ユニット 長谷川 路子

2013年11月26日～28日に、京都大学芝蘭会館稲盛ホールで、国際シンポジウム「Integrated Ecosystem Management from Hill to Ocean（森里海の統合的生態系管理）」を開催しました。このシンポジウムは、フィールド研の創立10周年を記念するとともに、森里海連環学教育ユニットの始動を国際的に知ってもらうため、開かれたものです。日本国内からはもちろん、韓国、ベトナム、フィリピン、バングラデシュ、



参加者の集合写真

リトアニア、ウクライナ、フランス、イギリス、カナダ、アメリカ合衆国、ブラジルなどを含む全19か国から、188名の

参加がありました。

初日13時に、山下洋ユニット長の開会挨拶で始まり、Session 1. Connectivity between ecosystem and its disruption が行われました。ブリティッシュコロンビア大学の John S. Richardson 教授による基調講演 'Why we need to protect the forest-stream connection to ensure water security and ecosystem services' の後、8題の口頭発表が行われ、フロアーからの発言も活発で、質疑応答の時間はあっという間に過ぎてしまいました。17時から、稲盛ホール前ロビーでのポスター発表に移り、全部で73題の発表が行われ、随所で熱い議論が交わされました。森里海連環学教育プログラムからも7人の履修生が、日頃の研究成果をポスター発表で披露しました。18時から、山内ホールで、フィールド研創立10周年の祝賀会も兼ねたバンケット（懇親会）を行いました。

翌27日は9時から、Session 2. Human impacts on watersheds and coastal ecosystems が始まり、北海道大学の白岩孝行准教授による基調講演 'Giant fish-breeding forest: a new environmental system linking continental watershed with open water' の後、7題の口頭発表が行われました。昼食と2度目のポスター発表を挟み、14時から、Session 3. Solutions for functioning ecosystems: management for maintain connectivity in human landscapesに移りました。プレスト大学のDenis Bailly 教授による基調講演 'An economist perspective on blue growth and conservation in the coastal zone' の後、11題の口頭発表が行われました。そして、19時過ぎ、吉岡崇仁フィールド研センター長の総括で、幕を下ろしました。

2日間で、口頭発表とポスター発表を合わせ101題の発表

が行われ、改めて、森里海連環学の幅広さを実感させられました。個々の発表は事例的な研究が多かったのですが、事例研究を積み重ねるとともに、これらの研究を相互関係に基づいて整理し、近い将来、体系的な森里海連環学としてまとめられることを期待しています。そして、多くの国々から参加いただいたことは、森里海連環学の研究をする仲間が世界中にいること、日本だけでなく世界各地で森里海連環学が必要とされていることを物語っているのだと思います。参加者の方から、「2年に1回、開催してほしい」、「森里海連環学の国際組織を作してほしい」などのご希望をいただき、嬉しい限りです。

最終日の28日は、エクスカーショ（視察）を行い、海外からの参加者を中心に約20名が参加してくださいました。紅葉真っ盛りの中、哲学者・西田幾多郎が思索にふけた「哲学の道」を、銀閣寺



エクスカーショ（南禅寺）

から南禅寺まで下りました。モミジの少しオレンジがかった赤や少し黒みがかった濃い赤、イチヨウの黄色などが、きれいなコントラストを描いていました。参加者は、和気あいあいと会話をしたり、立ち止まって写真を撮ったり、さぞ貴重な思い出を作られたことでしょう。

ご参加くださった皆さま、誠にありがとうございました。

教育ノート

森里海連環学教育プログラムの実施

森里海連環学教育ユニット 清水 夏樹

2013年4月に開講した森里海連環学教育プログラムでは、予想をはるかに上回る77人の履修生を迎え、2013年度前期・後期の講義・演習を進めてきました。たとえば必修科目の1つである「流域・沿岸域統合管理学」は、国内外の研究者によるリレー形式で行われ、様々な分野での研究アプローチが学べる科目となっています。7月からは48名の履修生が海外各地でインターンシップを行いました。そのうち、旅費等の補助金を受けた履修生にはウィークリーレポートの報告が義務づけられており、研修成果や日常生活の感想など日々の取り組みの様子が報告されています。後期に集中講義で行われる必修科目の「統合管理国際貢献学演習」（10人前後の少人数、テーマ別ゼミ方式で実施）は、各履修生のインターンシップの成果や研究テーマと森里海連環学との関連性などをもとに、実践に向けて議論する場となっています。本プログラムの科目は原則として英語で行われることから、英語での講義や議論への参加を支援するため、4～6月には受講生向け英語スキルアップ講座を開催しました。

さらに大学院の講義だけでなく、2013年度は5回の公開セミナー（通称 CoHHO セミナー）を開催しました。前述の国際シンポジウムに加えて、6月には、森里海連環学を広く

社会に発信していくため、東京赤坂の日本財団ビルにおいて、森里海シンポジウム「人と自然のきずな～森里海連環学へのいざない～」を開催し、約130名の参加を得ました。

開講当初は、英語での講義やインターンシップ・国際学会発表への補助金支給を期待して履修を希望した学生も、プログラムの中で徐々に森里海連環学の幅広さ・深さに興味をもち始め、アクティブ・ラーニング形式の講義や演習では積極的な発言・参加がみられるようになってきました。2014年3月には教育プログラムの修了記念イベントも予定されており、履修生もその企画作成に参加するなど履修生同士のきずなも深まりつつあります。



統合管理国際貢献学演習

環境政策・コミュニティ開発テーマグループ（2013年11月）

社会連携ノート

北海道研究林における社会連携

北海道研究林 館野 隆之輔

京都大学には、北は北海道から南は鹿児島まで、全国に様々な隔地施設がありますが、北海道研究林は北海道にある京大唯一の隔地施設です。標茶町と白糠町にあるそれぞれ1,446haと880haの森林を活用して、フィールド実習を年間で約4週間行うほか、道東のフィールド研究の拠点の一つとして、様々な研究プロジェクトを受け入れています。今回は、北海道研究林で行っている社会連携活動について紹介します。

従来より北海道研究林主催で行っていた標茶町民向けのミニ公開講座を発展させる形で、平成24年度、25年度の夏休み期間中に、小学生、中学生、高校生を対象とした科研費研究成果のアウトリーチ活動を行いました。これは日本学術振興会の研究成果の社会還元・普及事業「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」の一環です。また秋には、白糠町民向けのミニ公開講座を発展させる形で、大学主催の事業である「京大ウィークス」の一環として、自然観察会やネイチャークラフトなどを平成24年度から行っています。このように社会連携事業を充実させ、従来よりも広報活動に力を入れてきたことによって、町内からの参加者だけでなく近隣の市町村からの参加者が増える傾向にあります。

町内の教育委員会や小中学校との共催事業もいくつか行っています。標茶町沼幌小学校との共催の「木工教室」では、

子供たち自らがデザインした様々な木工作品を作ったり、竹馬作り、草木染めなど、毎年メニューを変えて行っています。標茶町教育委員会との共催の「しべちゃアドベンチャースクールジュニアリーダー養成講座」では、町内の小学生を対象に、スノーシューを



京大ウィークス2013
「京都大学ミニ公開講座・自然観察会」
(北海道研究林白糠区)

着用して冬の森林や樹木の様子、雪上の動物の足跡などの観察を行っています。また町の中心部にある標茶小学校の遠足では、毎年小学校3年生が小学校から研究林まで歩いてやってきて、森の植物や動物について学んで帰ります。この遠足は30年近く続く伝統行事で、標茶町市街地で育った人のほとんどが一度は研究林を訪れていることになります。

北海道研究林の近隣には、釧路湿原国立公園や阿寒国立公園などもあり、官庁や地方自治体、NPO法人などによる自然観察会やネイチャークラフトなどの催しが多数開催されていますので、参加者の確保にはいつも苦勞しますが、今後もフィールド研ならではの独自の企画を行っていければと考えています。

「木文化プロジェクト」が、高知県と京都府で研究成果報告会を開催

森里海連環学プロジェクト支援室 大川 智船

フィールド研が森里海連環学研究の一環として実施してきた「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業（略称：木文化プロジェクト）」が最終年度を迎え、お世話になった地域の皆様に研究成果を報告すべく2つの現地報告会を開催しました。

【仁淀川プロジェクト】

2013年11月10日、高知県仁淀川町にて、仁淀川地域連携講座「京都大学木文化プロジェクト最終報告会 in 仁淀川町 森と川とともに暮らす里の未来 — 仁淀川町からの発信。『森里海連環学』のこれまで、これから —」を開催しました（参加者55名）。講演後のパネルディスカッションでは、住民の皆さんによる真剣かつ熱心な議論が繰り広げられ、今後の森里海連環学に何が求められているのかを再度確認する機会となりました。〔以下、プログラム〕

挨拶：吉岡崇仁／奥田英雄（仁淀川の「緑と清流」を再

生する会会長）／大石弘秋（仁淀川町長）

研究報告：「仁淀川で木文化プロジェクトがめざしてきたもの」長谷川尚史／「間伐による土壌保全効果と混交林化の可能性について」深田英久（高知県立森林技術センター）／「仁淀川の水質と森林伐採」福島慶太郎／「30年後の仁淀川町の未来像を描いてみよう」大川智船

パネルディスカッション：「未来への提言 — 木文化サロン・みんなで話そう、未来のことを。」園山幹雄（仁淀川の「緑と清流」を再生する会）／大原栄博（池川木材工業）／植木明彦（仁淀川漁業協同組合）／西森善光（仁淀川森林組合）／コーディネーター長谷川尚史

【由良川プロジェクト】

2013年12月7日、京都府京丹波町にて、由良川市民講座「森・里・海の対話～森と生きる人々へのメッセージ～」を開催しました（参加者65名）。芦生研究林での伐採実験と森や環境への人々の意識調査について報告した他、我が国を代表する森林研究者の一人である只木良也氏から里山と人との関わりについて大変面白く分かりやすくご講義いただきました。会場後方には市民団体によるパネル展示を同時開催し、雰囲気は大いに盛り上げました。〔以下、プログラム〕

開会挨拶：金谷浩志（京都府中丹広域振興局長）

講演：「森と生きる人びとの活動と森林生態系」松山周平／「森と生きる人びとの意識」吉岡崇仁／「森と生きる人びとを育てる」只木良也（京都府立林業大学校長）

閉会挨拶：山下洋



パネルディスカッションの様子
(高知県仁淀川町)

受賞の記録

青木貴志（農学研究科修士課程・海洋生物環境学）スズキ仔稚魚の成長に関する海域間比較—耳石日周輪解析によるアプローチ—、2013年12月7日、優秀発表賞（平成25年度日本水産学会近畿支部後期例会）

田中 克 フィールド研初代センター長（名誉教授）が社団法人全国日本学士会 平成25年度アカデミア賞（文化・社会部門）を受賞しました。（2014年2月14日）授賞理由：森里海連環学の提唱とその実践を通じた生態系復興・環境保全をはじめとする数々の業績

活動の記録（2013年10月～12月）

シンポジウム等

企画展「海」（共催・京都大学総合博物館）（7月31日～12月1日）
フィールド科学教育研究センター創立10周年記念式典
（11月26日、京都大学医学部芝蘭会館）

森里海連環学国際シンポジウム「Integrated Ecosystem
Management from Hill to Ocean」（11月26～28日、京都
大学医学部芝蘭会館）

京都大学「木文化プロジェクト」最終報告会 in 仁淀川町
「森と川とともに暮らす里の未来」（11月10日、池川コミュ
ニティセンター）

第5回由良川市民講座「森・里・海の対話～森と生きる
人々へのメッセージ～」（12月7日、和知ふれあいセンター）

各施設における主な取り組み

＜和歌山研究林＞

ウッズサイエンス（和歌山県立有田中央高等学校清水分校
との共催・10～12月 週1回）

＜上賀茂試験地＞

上賀茂試験地秋の自然観察会（11月9日）*

未来のサイエンティスト養成事業（京都市青少年科学セン
ターとの共催・11月17日）

上賀茂試験地見学会（京都府立植物園ボランティアとの
共催・11月20日）

「世界のマツを観察しよう」（京都自然教室との共催・12月8日）

＜徳山試験地＞

周南市連携講座（11月24日）

＜瀬戸臨海実験所＞

防災訓練を実施（12月17日）

＜木文化プロジェクト＞

京都大学アカデミックデイ2013においてポスター発表
（12月21日、百周年時計台記念館）

＜森里海連環学教育ユニット＞

第8回森里海連環学公開セミナー（10月31日）

*京大ウィークス2013参加イベント

予 定

木文化プロジェクト研究報告会（3月5～6日、フィールド研会議室）
京都大学東北復興支援学生ボランティア（3月17～22日）

京都大学附置研究所・センターシンポジウム「京都からの提言
—21世紀の日本を考える」（3月15日、仙台国際センター）

白浜水族館の休館（11月1日～）

白浜水族館が耐震および改装工事のため11月1日から休館しています。2014年春に開館する予定です。

2014年度公開実習の実施予定 詳細は、フィールド研ウェブページをご覧ください。

＜瀬戸臨海実験所＞〔教育関係共同利用拠点事業〕

- （1）発展生物学実習（2014年8月下旬）
- （2）自由課題研究（2014年8月下旬）
- （3）藻類の系統と進化（2015年3月上旬）
- （4）海産無脊椎動物分子系統学実習（2015年3月上旬）
- （5）海産無脊椎動物多様性実習（2015年3月下旬）

＜芦生研究林・上賀茂試験地＞

- （1）京都大学公開森林実習「近畿地方の奥山・里山の森林
とその特徴」（2014年9月10日（水）～12日（金））

＜舞鶴水産実験所＞〔教育関係共同利用拠点事業〕

- （1）森里海連環学実習Ⅰ（2014年8月7日（木）～11日（月））
（芦生研究林と共同実施）
- （2）海洋生物科学実習Ⅰ（2014年8月25日（月）～30日（土））
- （3）海洋生物科学実習Ⅱ（2014年8月30日（土）～9月4日（木））
- （4）若狭湾秋季の水産海洋生物実習（2014年9月下旬）
- （5）若狭湾春季の水産海洋生物実習（2015年3月下旬）

フィールド散歩

— 秋から冬の各施設及びその周辺の様子をご紹介 —



ナメコ
（芦生研究林）



丸太検収
（北海道研究林）



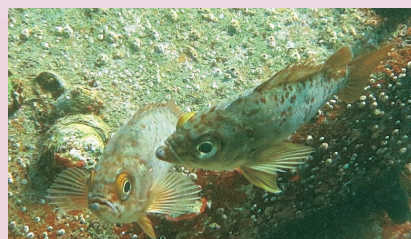
地域の小学生を対象に間伐体験学習
（和歌山研究林）



ツクバネガキの果実
（上賀茂試験地）



ヒトデのようなベニマンサクの花
（北白川試験地）



冬の海で愛を語らうアカメバル
（舞鶴水産実験所）